Title: 新報4573.ec7 Page: 1 Date: 2013/05/22 Wed 13:43:47

教団新報

定 価 1部140円（本体133円〒共200円）
予約購読料 1年分 〒共 5,000円
紙代のみ 3,500円
振替 00140—9—145275
本紙を購読ご希望の方は、前金をそえて、お近くのキリスト教書店へお申し込み下さい。
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所 日本基督教団
169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館内 電話03(3202)0546
FAX03(3207)3918
発行人 竹前 昇
編集主筆 竹澤知代志
印刷所 株式会社きかんし

メッセージ

マルコによる福音書 八章三一～三八節

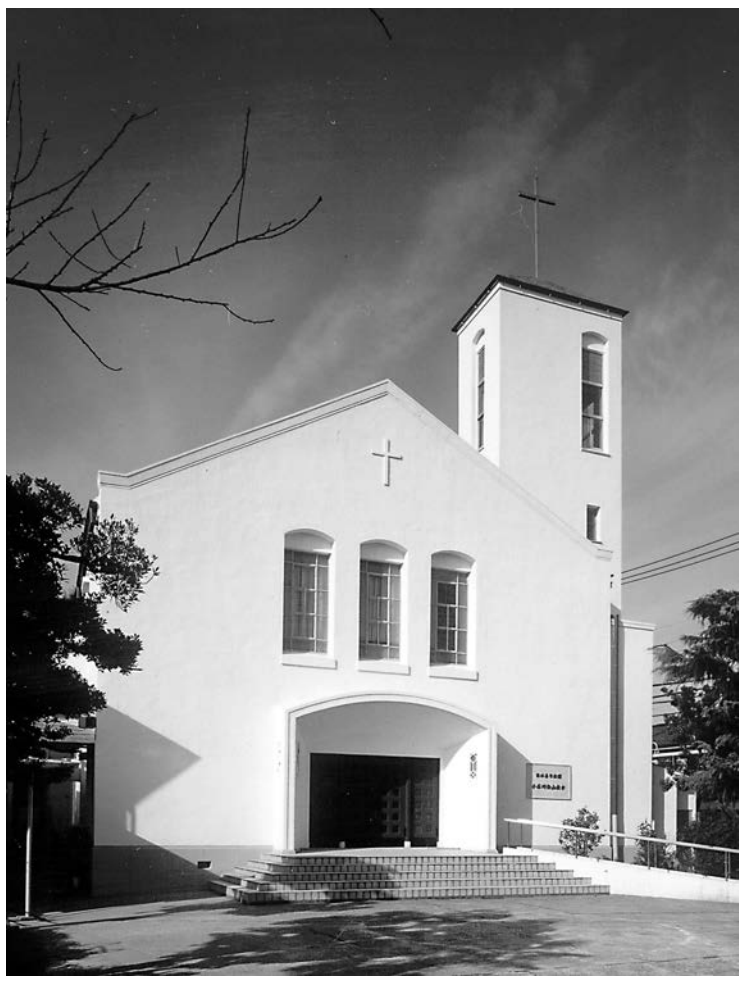
手をかけさせない神

古屋博規

イースターを前にしたレントの季節を迎えました。私たちは今、悔い改めと和解とを得て、共に聖餐に与るために、信仰への入門・再入門に備え、全ての者が原点に向き合うように導かれています。古代教会の人々は、四〇日間の修練（レント）の期間に、悔い改め・断食・祈りをもってこの時を迎えたと言われます。

執り成し

「人生は失敗と見ゆる処にて成功する。私が成ろうと熱望したのに成り得なかったそのことが私を慰める」（ロバート・ブラウニング）。この詩は、物事は成功だけでは判断できないことを教えてくれます。愛せる者を愛するということは簡単ですが、愛せない者を愛するという難しさを問われていることにも通じるような気がします。人間の営みの中に起こってくる様々な人間の振る舞いにも、神様は私たちと共にいまし、イエスの執り成される業を通して、私たちを原点に立ち返らせて下さることを覚えます。



小石川白山教会

手をかけさせない神

H・ナウエンは「傷ついた癒し人」の中で、「イエスは、健康と解放と新しい生への道を開くために、自分の身体を引き裂いて与えることにより、この物語に新しい豊かさをも与えられた」と言います。私たちに降りかかってくる、疎外・離別・孤立・孤独という、人間の傷のなかで最も苦痛なものが、驚くことに自らを傷つけている場合があります。この自分の痛みや苦痛が受け入れられ理解されたなら、自己否定はもはや不必要となるのですが、主イエスの受難と、復活の告知がもたらしたペトロの信仰をみてみますと、「あなたは、メシアです」（二九節）というペトロの姿勢が出て来ます。「人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われる」（ローマ一〇章一〇節）と言われるとおり、確かに、ペトロは主イエスをキリストと告白しました。ところが、主イエスが、人の子の受難をしめすことで、ペトロの思いはがらりと変化します。せっかくイエスを主と告白しつつも、舌の根も乾かないうちにイエスを脇へと引き寄せてしまう様が伺えます。そんな変わりやすい、移ろいやすい人間であるにもかかわらず、顧みて下さる方がいるのです。「そのあなたが御心に留めてくださるとは 人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう あなたが顧みてくださるとは」（詩編八編五節）

「それからイエスは、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている」（マルコ八章三一節）と弟子たちに教え始められると、ペトロは、イエスを、自分の方に引き寄せ、疎外されているかのように痛みを示して否定の意志を示します。彼は、イエスはキリストと告白したものの、キリストの栄光の場面だけを考えて受難を望まなかったのです。それにも増して、ペトロは、イエスの教えに反抗して自己主張をしました。イエスの受難は、イエスとペトロの間の私的な事柄ではなく、すべての人に関わる公的な重要問題です。神の御心に敵対し、神の計画から人を誘惑に誘い、苦しめ、殺そうとしているペトロを、イエスは、「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている」（三三節）と指摘して、ペトロに手をかけさせようとはしませんでした。

だからこそ

キリストに従うということは、生涯、イエスは主である、と告白し続ける事であります。イエスは、「わたしに従いなさい」（三四節）と、イエスに従うよう繰り返されます。自分が捨てられますか?と問われたなら、それは、禁欲主義的な否定ではなく、自己執着、自己信頼、自己追求などの自己目的化する思いを越えて、神に聴き、尊び、求め仕えることを積極的に目指すことだと言えるでしょう。私たちは、人には言えない苦悩や、弱さ、不完全さを持っています。それ故、自分は誤った生き方をしてはならない存在であると意識してしまいます。だからこそ、自分の十字架を背負って、キリストに従うためにあらゆる犠牲をもいとわないで、自分を捨てよと、イエスは自己中心性を厳しく否定されます。手をかけさせないとは、神の思いを越えないで、人の思いにとらわれないことです。それは、本当に、なかなか出来ることではなく、自分を愛するが故に難しい時が多々あります。

キェルケゴールは「死に至る病」の中で、死そのものが絶望ではなく、自分ではどうすることも出来ない淵に、陥ってしまうことが絶望だと言いました。絶望する時、自分を否定することが起こります。自分が自分であることがいやになり、ついには自殺までへと追い込まれ、人は手をかけてしまうのです。自分をもっと大きくしよう、自分を前に出そうと、他人を押しのけ、自分が絶望していることにも気がつかないで、自分自身の中で絶望に至ってしまいます。ペトロは、自分や周りに無関心となり、イエスを引き寄せ自分を大きく見せようとしたのです。主イエスは、そんなペトロにしっかりと向き合い「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」（三四節）と応えておられます。「自分の十字架を背負う」と言うことは、自分の中にある醜さやいたらなさ、弱さ、欠け、破れを恥ずかしいことと思わないで、それを表に出して、ある時にはそのことを誇りにしながら歩いて行くことだと思います。神さまから与えられた現実から、逃げることなく、「むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇って」（Ⅱコリント一二章九節）歩くことだということです。

にもかかわらず

先日の教師研修会の折り、年輩の先生方が、ご自分の伝道牧会のあしあとを振り返り、「あと〇〇年したら退かせていただきたい」と、後進の者たちに伝えておられました。無牧化しつつある地方教会の宣教、絶望しそうになる牧師の抱えている宣教のフィールド、都会のドーナツ化現象、これらの課題にどう向きあったら良いのでしょうか。実は、主イエスが弟子であるペトロに語りかけたことは、現代の宣教を担って行こうとする牧者への語りかけの様にも聞こえます。「自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」（三四節）というイエスの言葉に、実際の私たちの現実は、従いきれず、手をかけようと自分に執着してしまう姿を隠せません。にもかかわらず、主は、私に向かって振り返り、手をかけさせまいと、「振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われ」（三三節）イエス・キリストの十字架のもとへと、私を引き戻して下さるのです。

（小石川白山教会牧師）

荒野の声

▼地震の被災地を豪雪が襲っている。新聞テレビで見ても、凄まじいばかりだ。▼初任地の教会は大通りに面していた。早朝ブルドーザーが走り、路面が見える程きれいに除雪される。その分、教会の玄関には、時に高さ二mの雪の壁ができる。朝六時頃、かちかちに凍り付いた雪に、スコップ時にはツルハシで向かい合う。九時からの教会学校に間に合わないくらい暇取ることさえあった。大雪が降るたびに、この繰り返し。▼雪について事実ありのまま記したら、大法螺或いは被害妄想と受け止められるだろう。出典不明だがこんな話を聞いた。「立ち小便するなかれ、この下に高田の町あり」。町全体が全く雪に埋もれているという意味だ。▼雪国の子供はそれでも雪が大好き、秋が深まると初雪を待つ毎日。田畑が清々しい雪に覆われると、寒さも忘れて心弾む。大人だって同じだ。今よりずっと雪が多かった江戸時代の『北越雪譜』舞台は地震被災地域に重なる。豪雪に苦しみながらも、なんと雪を愛していることか。日本一と名高い米を初め多くの恵みも、雪がもたらしたもの。

Title: 新報4573.ec7 Page: 2 Date: 2013/05/22 Wed 13:44:15

世界宣教の幻は止まず

ＪＮＡＣ最終総会開かれる

ＪＮＡＣ最終総会会議

日・北米宣教協力会（ＪＮＡＣ）の最終総会が一月二四～二五日に米国ケンタッキー州ルイビルの米国長老教会本部で開催された。参加者は、北米各ボードから二名ずつの一二名。日本側は六名。ゲスト四名、通訳三名、スタッフ三名、の計二八名であった。教団／ＣｏＣからは山北宣久議長、竹前昇総幹事、久世了ＣｏＣ議長、上田博子ＣｏＣ総幹事が出席した。

総会は山北議長の「聖霊による導き」と題する英語による説教と司式、崔正剛在日大韓基督教会（ＫＣＣＪ）総会長の祝祷による開会礼拝を持って始められた。協議はＪＮＡＣ元コーディネーターのパット・パターソン氏の「ＪＮＡＣの宣教協力についての歴史的回顧」のレポートの発表から始められた。

パターソン氏は「一九七三年から三三年間ＪＮＡＣは多教派間の宣教協力のモデルであり、ＫＣＣＪと教団の関係もＪＮＡＣを通して深められ、また、人権問題、環境問題、沖縄の基地問題、女性の連帯等に取り組み、一定の成果を上げた。宣教師を含めた人事交流で共に神の国の宣教の業を担い合うことを学んだ」とＪＮＡＣを高く評価した。そして、ＪＮＡＣは解散するが、時代にあった新しい形の共同体と協力体制を設立してほしいと結んだ。

解散に関する報告、会計報告に続き、ＪＮＡＣ解散の正式決議が可決された。解散の条件になっている在日本インターボード宣教師社団の定款の変更許可が文化庁から出ていないので、許可が下りた日を持って解散が有効となるという文言を付加しての決議書の作成となった。また解散公告も翻訳されて発表されることになった。

ＪＮＡＣの古文書についても協議された。この文書はＪＮＡＣ関係だけでなく、ＪＮＡＣの前身であるＩＢＣ（基督教事業連合委員会）の関係文書も含まれている。日本と北米に保存されているこれらの文書は、教団／ＣｏＣとＵＭＣ（合同メソジスト教会）がそれぞれ責任を持って保管することが決定された。

解散後、ＪＮＡＣのメンバーで宣教協力の一環としてフォーラムが開催されることが前回の総会で決定されており、今回は、第一回を日本で開催することと、予算が可決された。さらにＫＣＣＪとの共同提案という形で、山北議長がフォーラムの具体的な内容の提案と主旨の説明をした。二〇〇六年または二〇〇七年の初めに同フォーラムを開催することが了承され、ＫＣＣＪと教団で協議をして準備をすることとなった。

ＪＮＡＣ解散後は、ＫＣＣＪと教団は北米各教会と個別に対応していくことになる。教団としては、北米各教会と宣教協約、宣教合意書、宣教覚書等何らかの文書を交換したいと山北議長が協議の中で提案した。今後教団は、北米各教会と折衝を重ねていくこととなる。

第一日の夜は宿泊ホテルで夕食会が持たれ、今総会のホスト教会である米国長老教会からも多数の関係者を迎えた。ゲストのパターソン氏、ボブ・ノーサップ氏（元コーディネーター）ヒロシ・ジョー氏、トニー・カーター氏（元在日会計）からＪＮＡＣの忘れえぬ貴重な楽しいエピソードが語られた。

また、退任するスタッフへの献身的な働きに対する感謝が述べられ記念品が贈られた。そして、北米各教会には、ＫＣＣＪと教団から日本語（英訳付き）の感謝状と記念品が両教会の総会長と議長から贈呈された。

教団はＪＮＡＣの解散に伴い、ＣｏＣとの関係を今後どの様にしていくかが大きな課題となった。教団／ＣｏＣの関係は、わかりにくくなっており、北米側の理解を得にくい構造となっている。

ＪＮＡＣは二〇〇五年一月二五日、久世ＪＮＡＣ議長の挨拶、閉会礼拝のジョン・リーＲＣＡ宣教プログラム幹事の説教、ウィル・ブラウンＰＣＵＳＡ世界宣教局副ディレクター司式による聖餐式、上田博子ＣｏＣ総幹事の祝祷をもってその歴史を閉じた。

ＪＮＡＣ最終総会参加者一同

日・北米宣教協力六〇年の歩み

宣教の歴史に一つの区切り

このたび日・北米宣教協力会が解散することによって第二次大戦後の日本基督教団と北米諸教会との宣教協力の歴史が一つの区切りを迎えることとなった。

第二次大戦中の日本基督教団は国際的に孤立状態であり、政治的弾圧と戦災によって深く傷ついていた。戦後間もなく米国の諸教会は交わりと援助を開始し、一九四七年四月、北米八教派は、合同教会としての日本基督教団と協力する意志を持って「基督教事業連合委員会」Interboard Committee on Christian Work in Japan（略称IBC）を組織した。会衆派基督教会、ディサイプルス教会、福音改革派教会、福音同胞教会、メソジスト教会、米国長老教会、アメリカ改革派教会、カナダ合同教会である。

これに対応して日本側では翌年二月に、日本基督教団、日本基督教育同盟（後にIBC関係学校協議会となる）とIBCとで「内外協力会」Council of Cooperation（略称CoC）を発足させ、一九五二年には日本基督教社会事業同盟がこれに加わった。

それから十余年の間、IBCはCoCを通して、日本における教会とキリスト教学校、社会事業の戦後の復興とエキュメニカルな交わりと宣教に、実に大きな貢献をしてきた。

建築支援、宣教師派遣、海外留学生の受け入れ、宣教のスペシャル・プロジェクトの推進等、戦後の基督教の大きな進展にIBCが果たした役割はまことに大きいものがあった。

しかし一九五〇年代の終わりごろ、日本の教会が立ち直り、またエキュメニカルな教会関係において対等なパートナーシップが自覚されるようになり、そこから内外協力のあり方、宣教師の働き、協力資金等についての見直しが始まった。特に日本宣教における教団の経済的自立と宣教協力の相互性が求められるようになった。更に一九七〇年代の教団紛争は内外協力会の潤活な運営を妨げた。

このような情況から一九七三年にIBCは、日本基督教団をもその正式構成員とする「日・北米宣教協力会」Japan North American Commission on Co-operative Mission（略称JNAC）へと発展解消した。その後の加盟もあって、最終段階ではその構成員は、合同メソジスト教会、米国長老教会、アメリカ改革派教会、基督教会（ディサイプルス）と米国合同教会（この二つは海外宣教局を合同）、カナダ合同教会、カナダ長老教会、日本基督教団、在日大韓基督教会となっていた。日本基督教団の場合は、これまでの歴史的経緯もあってCoC（現在は教団とCoC関係学校協議会と日本キリスト教社会事業同盟によって構成）が直接の窓口となっていた。

JNACの三十年の歩みは、宣教師派遣を中心とする内外宣教協力と、指紋押捺、沖縄基地、女性の連帯等、人権や環境問題への取り組みの協同などに大きな働きをしてきた。

今後はJNACの枠組みは、執行機関ではなく諮問機構となるので、教団としては、北米各教派と一対一の教会的宣教協力関係を築いてゆくことになる。世界宣教の一翼を担うものとしてよい形成がなされるように願うものである。

（世界宣教協力委員会　大宮　溥報）

JNAC25周年パーティー

海外宣教を支え祈る

世界宣教協力委員会

第34総会期第一回世界宣教協力委員会が、去る二月四日、教団会議室において開催された。今期の委員は大宮溥、上内鏡子、木下宣世、小橋恵子、相良真彦、友川栄、村山盛芳の七名である。

まず委員会の組織がなされ、委員長に大宮溥、書記に木下宣世、実務委員に村山盛芳が選ばれた。

今期の委員の顔ぶれは新しく選ばれた人が多かったので、この委員会の役割や取扱う事項についての説明を受けながら十四項目にわたる報告を主として上田博子担当幹事より聞いた。

新委員の人たちは当委員会が多岐にわたる多くの事柄にたずさわっていることに改めて驚き、責任の重さを感じさせられた様子であった。

昼食後、協議に入り、まずスイス協約委員会の委員に鈴木重正、中道基夫、廣石望の三名を選び、台湾協約委員に大宮溥、村山盛芳、李孟哲の三名を選んだ。

その後、海外に派遣している宣教師の方々の辞任に伴う人事の件や、日本の任地に海外からの宣教師を受け入れる件等を協議した。

その中で特に覚えて祈ってもらいたいことは、サンパウロ福音教会に派遣されている小井沼國光宣教師が難病にかかられたことである。

そのため同師は昨年十一月に帰国され、検査を受けてこられた。

その他、以前からの引継ぎ事項である「常議員会よりの回付議案に関する件」（教団の世界宣教の姿勢に関する件）についても協議した。その結果、継続して作業を進めていくこととなった。

なお、今回の委員会には海外へ派遣された宣教師からの年度報告書が寄せられ、それぞれの宣教師の現地における働きの様子や生活ぶりがよくわかり有益であった。

委員会としては各委員が手分けしてこの年度報告書に対する返書を出すこととした。

最後に海外に派遣されている宣教師、海外から日本に派遣されている宣教師の働きに対し、神の導きを祈って閉会とした。

（木下宣世報）

責任の重さを感じつつ

Title: 新報4573.ec7 Page: 3 Date: 2013/05/22 Wed 13:44:41

灯を消すことのないよう祈り支える

中越地震・再建支援委員会

一月三一日、強い寒波襲来の中、関東教区三役の案内で「新潟県中越地震」被災五教会を訪問した。長岡駅に集合、車三台に分乗し、長岡教会から訪問を開始した。一台は十日町教会ボランティアセンターの車で、新井純牧師が一日同行して下さった。参加者は全員太平洋側の居住者。雪国新潟でも豪雪地の雪に驚かされながらの訪問となった。

小出教会の雪掘り

各教会の牧師・信徒の方々から被害状況を伺うと共に建物を見学し、委員会の果たす役割の重さをひしひしと思わされた。各教会及び付属施設の被害程度は夫々だが、建物の復興のみならず、この困難な時に教会がそれぞれの地域で良き働きをされ、証をされたその灯を消すことのないよう皆で祈り支え合いたいと思った。

十日町教会ボランティアセンターの活動は今なお継続中である。奉仕される方々の健康を心からお祈りし、一日も早い再建・復興を共に成し遂げたいと願うものである。

翌三月一日は、十日町教会で第二回委員会が開かれた。事務局より第一報として、「新潟県中越地震被災教会会堂等再建支援のお願い」を各教会五部ずつ発送したとの報告を受け、今後当委員会のアピールをどのようにするかについて以下のような話し合いがなされた。

▽三月中旬を目処に、発足から支援の具体的内容、実状等を知らせる「委員会ニュース」を作成し、各教会へ配布する。

▽アピールは関東教区と別個に行うのではなく連携して行う方が良い。

▽関東教区では、これから順次開催される各教区総会へ、代表者を派遣したいとのことなので、その代表者に当再建支援委員会の文書を託すことを考える。

その他、「新潟県中越地震」に関する募金は現在のところ窓口が三つあるが、募金に対する信頼を損なわないためにも、常議員会に逐次会計報告を提出すること、各個教会へ配布するかどうかについては後日検討することが話し合われた。

（朝岡瑞子報）

十日町教会で新井純牧師も加わっての支援委員会

議案否決と今後の取り組みについて協議

第一回年金局理事会

一月二二日、第34総会期第一回年金局理事会が開催された。

昨秋の教団総会に常議員会から提案した「教団年金危機打開に関する件」が否決されて初めての理事会であったので、議案否決と今後の取り組みについての感想と意見を、自己紹介とともに全員が発言した。

▽年金財政が危機的状況にあることは理解できるとしても、その打開の為に、諸教会に献金依頼をするというやり方は安易に過ぎたのではないか。

▽給付カットと掛金アップを並行して実施するなど、大胆な改革をしないと献金に頼るだけではできないのではないか。

▽教団の年金制度はぜひ継続していきたいが、教会を取り巻く環境から考えると、議案の内容がやや大雑把ではなかったか。

▽教区としては年金より教師の謝儀保障に力を注いでいるのが実情である。

▽小規模教会が多い教区なので、財政的に厳しく、負担金減額の方向にある。

▽教団総会での声を謙虚に聞き、次回総会では賛同を得られる案を練らないといけない。今後の取り組みについては選択肢を再吟味することから始めたい。

▽年金受給者と若い世代とは考えることに温度差がある。年金問題を考える際には、三十代、四十代の視点を入れて一緒に考える必要がある。

▽教団総会での否決の意味は、沖縄教区の欠けたところで決議すべきではないということ、練り直してもう一度提案せよということだと思う。継続よりはよかったのではないかと思う。教団年金を永続させるための抜本対策を立案する必要がある。

▽議案提出にいたるまでの年金財政の検証の数字は正確であり、提案理由も論理的であったと思うが、理論的説得だけでは賛同は得られなかった。献金の負担能力とか、具体的に実行できる可能性とかを探ることが欠けていたのではないかと思う。

▽『隠退教師を支える運動』の議案が可決されたのは教団紛争の最中一九七八年であったが今日まで続いている。自発性のある献金だから続いている。経常収入額によって献金額の目安が決められたことに負担金化されるのではないかという不安と抵抗があったのではないか。

▽年金問題は本来、いわゆる右とか左とかいう教会政治とは無関係なはずであるのに、ひとつの側に与している理事長への反発があったと思う。その責任は大きい。

▽教団の現体制とか、大教会に対する不信のような感情があったように思う。今後は受洗者の減少、信徒の高齢化等を度外視はできないが、人道支援の募金ではなく、あくまでも献金の本質に立ち返って進めてほしい。

ついで理事長、書記の選任をおこない、理事長に小林貞夫、書記に高橋豊を再選、常任理事は、理事長、書記、疋田國磨呂、竹前昇総幹事の四名を再選した。

次回理事会は六月一六日～一七日開催予定。

（青地　恵報）

年金局理事会

教区交換講壇について学ぶ

西日本五教区合同宣教研究協議会

一月二四日～二五日、岡山教会において、第四十二回西日本五教区合同宣教研究協議会が開催された。

東中国教区教師部委員長・延藤好英氏による開会礼拝に続き、九州教区・古澤啓太氏、四国教区・黒田若雄氏、西中国教区・西川晃充氏が各教区報告を行なった。

まず古澤氏は、宣教研究委員会二〇〇四年度の主な取り組みとして、①「九州教区年表（続編）」の作成②「九州教区と沖縄教区との関係史」（仮称）年表作成③奄美宣教史（仮称）作成④「教区通信」保守作業について報告された。

次に黒田氏は、今年度の宣教研究委員会の活動として、①互助の研究②伝道地図の作成③各個教会史に関わる資料収集④教区史年表（一九九八～二〇〇二年）の作成等について報告された。そして西川氏は、①教区宣教基本方針・方策の見直し②教区教職研修会③分区間協力における若干の提言について報告された。

夕食後の発題（一）と協議の時には、東中国教区議長・宇野稔氏が今年度より開始した「教区交換講壇」について発題し、教会・信徒どうしの顔の見える関係づくりと、それを軸として、福音宣教の課題の共有と深化の大切さを力説された。

二日目の発題（二）と協議の時には、東中国教区において二〇〇〇年より隔年で開催されている「教区の集い」を手がかりにして、藤原寛人氏と草地大作氏が共同で発題をされた。両氏は、その開催に至るまでの経緯と、鳥取県西部地震によって問われた教区の連帯意識をふまえて、「教区の連帯と課題」を提言された。

二〇〇二年までは沖縄教区も交えて当協議会を行なうことができたが、今回も残念ながら「痛みを覚えて欠席します」との連絡を受けた。出席者全員で寄せ書きをし、次回協議会での再会を祈った。

なお当協議会は、教団主催ではなく西日本五教区の自主性によって開催され続けてきたもので、教団宣研はオブザーバーであることを確認し散会した。

（卜部康之報）

東海教区

伝道について思う

北　紀吉

教区コラム

「教区コラム」の依頼を受けた。議長に引き続いて副議長に、とのこと。何処やらの教区総会では、「副議長は閑職だから手当ては減らせ」との尊いご意見があったとか。「議長事故あるときには」との規定故、無理からぬことか。今回のご依頼は、副議長には責任が無いので好き勝手に意見が言えるのではとのご意向でもあろう。しかし、「議長を助けて」ともあり、議長の思いを越えて好き勝手、無責任に書くことも出来ない。

東海教区では、十二月の臨時総会で福祉厚生規則の改訂を行った。福祉も厚生も同じような意味合いではとの思いもあるが、なによりも福祉・厚生は、伝道のためとの思いが募っての改訂である。と言うことで「東海教区伝道厚生規則」と表題からして変えた。東海教区の伝道への思いを受け止めていただければ幸いである。

近頃思うことがある。新来者の減少である。私の牧する教会では、昨年は前年より二十名ほど減少している。私自身の悪名によるのかも知れないが、日本社会の宗教離れが進んでいることも起因していよう。伝道とは具体的な方策を採ることである。現実の状況を正しく受け止めて具体的な取り組みをしなければならないと痛感している。

伝道は神のみ業。それ故にこそ共々に、「心を合わせて熱心に祈り」たいと思う。聖霊なる神が臨み、私共のなすべきこと、なしてはならないことを御示しくださるが故に。

（東海教区総会副議長）

Title: 新報4573.ec7 Page: 4 Date: 2013/05/22 Wed 13:45:07

牧師のパートナー

壁の穴

中谷 郁美
（熊谷教会員）

「神からいただいた恵みを無駄にしてはいけません。なぜなら、『恵みの時に、わたしはあなたの願いを聞き入れた。救いの日に、わたしはあなたを助けた』…」（Ⅱコリント6・1～2）のみ言葉を贈られて、40才台半ばで、静岡教会で伝道師をしていた夫と見合い結婚をした。静岡の2年余りは忙しかったが、楽しかった。二人でいる時は、互いに自分の体を休ませる事で精一杯だった。その後、熊谷教会に招かれ、今、7年目を終わろうとしている。

わたしの愛唱聖句は、「彼が担ったのはわたしたちの病、彼が負ったのはわたしたちの痛みであった…」（イザヤ53・4）である。4年前、子供の時から患っていた慢性腎炎が悪化して、在宅での透析治療が始まった。1日4回、4～5時間置き、2Lの薬液を腹部のチューブで出し入れする。操作は至って簡単。しかし、体力、気力は確実に落ちた。

そんな私の傍らで牧師として、幼稚園の園長として日々を過ごす夫。素朴で、弱さを隠さない。「あるがまま」、「無理しない」が口癖だ。子供の頃は動物園の園長になりたかったとか、犬、猫、金魚の世話はもちろん、私の助けも黙々としてくれる。わたしは、素直に、感謝している。

一方、私は口うるさい。家事は夫に甘えてそこそこ。しかし、教会雑務では欠けがないようにと、あれもこれも。気持ちが先行して疲れ果てる。冷たい空気が漂う。「おれはいたっておとなしい人間だ。怒られないでくれ」と夫は言う。

ある夕礼拝前、言い争った。その後、「ドタン、バタン」と大きな音。夫は礼拝堂へ。私は恐る恐る辺りを見回した。壁に穴が開いていた。慌てて カレンダーで隠した。数日後、「何をしたの」と聞くと、「お前を叩くわけにもいかないから、壁を蹴った」と、悲しげな顔で言った。「恐ろしい人」と思った。暫くして、カレンダーを外して見た。粉々に砕けた壁、その奥に冷たい闇が潜んでいた。突然、「わたしだ。この穴をあけさせたのは、わたしだ」との思いが心を突き刺した。「もう止めよう。追い詰めるのは」。私は夫との生活のあり方に、思いを巡らし始めた。

「わたしの助けはどこから来るのか。わたしの助けは来る 天地を造られた主のもとから」（詩篇121・1～2）は9年前私が夫に贈ったみ言葉だ。

夫は毎日曜、み言葉を語る。私はそのみ言葉に留まり、生きてきただろうか。キリストの眼差しを避け、自分の力で何かを埋めようとしていたのではないか。「壁の穴」の正体は「罪」だと知った。罪は絡みつく。「自分に拘らず、キリストを見続ければいい。ゆだねる事が課題だ」と、夫は自身にも言い聞かせるかのように言う。そんなある日、「罪を離れて立ち帰るなら、…罪を赦してください」とのソロモンの祈りの言葉が心に迫ってきた。「主よ。ごめんなさい」。涙が溢れた。心の深い所に静けさが広がった。

今日も夕食後、礼拝堂で十字架の下に立つ。夫のギターに合わせて精一杯賛美する。ああだこうだと話し、祈る。楽しくて、暖かい。キリストの恵みを味わう者として、二人はここにいる。

中谷郁美・中谷清さん夫妻と愛猫ヨナ

ボランティア活動報告 東海教区

東海教区常置委員会は関東教区からの要請に応え、「中越震災救援活動」を決議し、支援ボランティアを募って、04年11月9日（火）より12日（土）まで派遣した。

募集に応えたボランティアは延べ21名であった。十日町教会が救援活動の地域センターの一つに指定されており、私たちは会堂を寝食の場所として利用させて頂いた。

ボランティアは十日町市、小千谷市、川口町などに開設されている救援センターに出向き、登録をして様々な救援要請に応えて各地に派遣されることになった。主な任務は震災で散乱状態の家屋の後片づけ、炊き出しの手伝い、壊れた家屋の補修などであった。

全国から老若男女の夥しい数の救援ボランティアが集まっており、被災地域の人々との交流、ボランティア同士の交流があちこちに感動の波紋を描いていた。

倒壊した家屋の後片付け

被災地域に突如このような「よそ者」が一時的であれ流入し、信頼と協力の分かち合いが起こったのは、恐らくこの地域では初めてのことであったであろう。

このような救援活動の意味は、全国からの募金および救援が発した励ましのメッセージにあったのではなかろうか。教会もその一端に加えられたことを感謝したいと思う。

十日町教会が魚沼産コシヒカリのご飯を炊いて下さり、ボランティアは近所のスーパーで調達した惣菜で夕食をとり、寝袋で夜を過ごした。

全国の教会やキリスト教主義学校から派遣されてきたボランティアと交流の時を持ち、毎夜7時から新井純牧師の司会でもった祈祷会は感動的であった。

（山本将信報）

ボランティアセンターの前で

ひとときの人

飯田英章さん

ただ今単身赴任中

「ただ今、単身赴任中です」と飯田さんは屈託がない。火曜夕方から木曜夕方まで東京・八王子の自宅で過ごし、夫人手造りの五日分の食べ物をアイスボックスに詰めて教会に戻る。生まれも育ちも東京で、一人暮らしは初めてだそうだが、「野菜も自分で作っていますよ」と教会菜園を見せてくれた。

都庁勤務時代、聖書研究会に所属していた飯田さんは、定年を迎えた際、第二の職場を薦められたが、「神学の勉強をしたいから」と固辞して東神大に学部編入し、大学院を卒業して、昨年春、九十九里教会に赴任した。都庁聖研時代の仲間が多数礼拝に出席して激励してくれたという。

六〇歳を過ぎて、何故牧師の道を志したのか。「娘を事故で失ったことがきっかけかもしれない」と飯田さんは淡々と語り、「昨日もたまたま、ヤイロの娘のくだりを読んでいたんです」とつけ加えた。

九十九里教会は一八八三年（明治一六年）、創立一二一年を数える由緒ある教会で、一八八七年建設の木造の会堂は、さる九九年、登録有形文化財の指定を受けた。明治期、会員が百人を数えたこともあったそうだが、現在平均出席一七、八人、無牧の時期もあった。近隣の商店街ではシャッターを下ろした店も多く、この一帯、伝道には厳しい状況が続いている。

「ご多分に洩れず高齢化は顕著で、七〇代が大半を占めるが、信仰暦五〇年に達する強い信仰を持っていることに励まされる。しかも、殆どが同じ教会で過ごしたことは奇跡的なくらい」という。昨年のクリスマス・コンサートは、教会から出てケアセンターで行い好評だった。老人パワー健在な点は、全国諸教会共通のことだろうが、こうした話に接するとやはり勇気づけられる。

伝道師二年目。「皆に良くして頂いて本当に有り難いことだと思う。今、非常に楽しい日々」と飯田さんは静かに燃えている。

1940年東京生まれ。都庁勤務を経て東神大大学院卒。04年4月、九十九里教会主任担任教師

終わりから初めへ

別掲の如くJNACの閉会総会に出席してきた。戦後60年を様々なかたちで記念される年だが、IBCから数えて57年間、北米・カナダの教会が日本の福音宣教のために捧げた大きな祈りと実践の実は日本伝道史に不滅の光を放ち、語り継がれていくものであろう。天に移された先達をはじめ多大の貢献をされた宣教師とその家族の方々に心からの感謝と敬意を表してやまない。主が豊かに報いて下さるように。

問題はJNAC以後である。大きな組織連合体としての関係は終ったが、個別の新しい関係はこれから始まる。

教会と教会の関係がより現実的、直接的、具体的に結ばれ各個の教会に影響を与えるようなものとなるように関係者がみんな願ったうえでのJNAC解散である。

北米・カナダ八つの教派、教団が日本基督教団及び在日大韓基督教会とそうした新しい関係に入っていく。

そのため日本基督教団も新しい機構改正を考えねばならぬが、世界宣教の生きた関係によって教団自身が変えられ、成長させられていくことを信じてやまぬ。

特に次世代対応型として青年、青少年同士の交流をも視野に入れての新しい協約結びであるはずだ。現に総会以後訪問したディサイプル教団、UCC教団とはそうした方向で将来のビジョンが語られた。

一つの終りが一つの初めに通じていくことを祈る。

（教団総会議長 山北宣久）